

# さようならも簡潔に

## The brief goodbye

Nature Vol.443(246)/21 September 2006



投稿論文にみられる諸傾向を考慮し、*Nature* の Brief Communications は本年末で終了することが決まった。

Editorial のページでは、*Nature* のセクション創設やリサーチ誌の創刊があるたび、そのことを誇らしげに発表してきたが、終了や廃刊の報告を行うことはこれまで実に稀だった。今回、2006年の最終号をもって『Brief Communications』のセクションを閉じることを発表するにあたり、私たちは複雑な思いを抱いている。しかし、重要な点として、オンライン限定の『Brief Communications Arising』(*Nature* に掲載された研究論文に関する批判的議論を掲載するセクション)を私たちが改めて全面支援していく旨を、ここに表明したい。

Brief Communications セクションは、*Nature* 中のジャーナリスティックな記事や著者が独自の主張を展開するセクション、そしてレビュー論文や本格的な研究論文への橋渡しをしてきた。その目的は、両者もつ知的興奮や魅力をともし取り込むことにあり、それは読者層とメディアに十分なインパクトを与えるうえで意味あることだった。

ラットのロボット、新石器時代のヌードル、ナノサイズのウシ、クローンネコ（悪名高きクローンイヌに加えて）、月の北極での諸現象、女王の発する母音、はたまた、靴ひもを最もうまく結ぶ方法を見つけるためのモデルに関する論文——。このほかにも数々のテーマが取り上げられ、Brief Communications に掲載されてきた。論文の長さは通常1ページ以下だが、それぞれ、最新の科学ニュースを垣間見せてくれるものもあった。例えば、インドネシアの大地震、SARS、鳥インフルエンザ、そして2001年9月11日のテロ攻撃後の3日間、旅客機が運行を停止したことによる気候に対する意外な影響といったもの。すべての論文は、厳しい査読に支えられてきた。Brief Communications の成功は、*Nature* の水準を下げることなく、しかしこのセクションにしばしばみられた風変わりさにも合わせてくれた、査読者の力に負うところが大きい。

Brief Communications には批判もあった。冷静な科学者は、Brief Communications というはかない光を放つろうそくによって、自分の履歴書に記された *Nature* の文字がもつキラ星のごとき輝きが損なわれることを恐れた。Brief Communications は査読が行われていないというデマが流れ

たのも、一度や二度の話ではない。しかし *Nature* は、この短い傑作論文の数々を、その風変わりさを含めて支えてきた。

ならば、なぜ人気が高く、かつ今でも紙幅を大きく上回る量の論文が投稿されているセクションを廃止しなければならないのか。私たちは、今回の廃止決定は、投稿論文に最近顕著にみられるようになった諸傾向に対する適切な対応であり、結果として誌面をより有効に利用できるものと考えている。Brief Communications に投稿される論文には、一定の基準に達しているものの数が減ってきている。おそらくは短編論文という形式、そしてオンライン上に掲載できる補足資料も限定されるといった制約によるのだろう。ここ最近、内容的に軽すぎる論文、技術的すぎる論文、長すぎる論文、あるいは研究の蓄積が不足した論文が数多くみられるようになってきた。

また、今日特有のプレッシャーによって、科学研究は従来に比べ、まじめで専門性の高いものとならざるを得ず、その成果発表においても内容的により詳細であることが求められているのかもしれない。DNA の構造に関するワトソンとクリックの論文が、Brief Communications に掲載される論文の長さだったことは、もはや過去の話なのだ。

*Nature* の Brief Communications の廃止は、各 *Nature* リサーチ誌における Brief Communications には影響を与えない。より専門性の高い読者に向けた短編論文の居場所は、依然として残るのである。しかし *Nature* では今後、むしろ Brief Communications Arising の支援に注力していく。このセクションでは、*Nature* に掲載された論文に対する批判的な見解が展開されており、さらにそれらに対して、通常は原論文の著者による回答も寄せられている。

最後に、Brief Communications のもつもう1つのよき特徴である「簡潔さ」について、私たちはこれからも意識していく。論文の質は、広大なウェブ空間によって高めることができるといわれており、論文の長さはそれほど問題ではなくなった。*Nature* は引き続き、簡潔さを擁護し続けていく。論文著者はこの点に留意してほしい。そして、読者の皆さんにおいては、この点はこれからも安心されたい。■